

遺跡と調査の概要

遺跡の概要 中畑・古里遺跡は野洲市妙光寺に所在し、弥生時代から中世にかけての集落遺跡として知られています。遺跡は野洲川右岸の三上山や妙光寺山近くの扇状地上に立地しています。

中畑・古里遺跡での弥生時代に関するこれまでの調査成果では、弥生時代中期後葉～後期初頭(紀元前後/約2,000年前)の円形竪穴建物や、日本海沿岸地域との関連が指摘されている多角形住居、方形周溝墓などがみつかっており、集落域や墓域の一端が垣間見られる成果が得られています。しかし、それらの分布は広範囲に点在しており、当遺跡にあった弥生時代のムラは頻りに移動を繰り返して、それぞれの地点では短期間しか存在しなかったと考えられています。

調査の概要 今回の調査は、野洲市教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会・公益財団法人元興寺文化財研究所が分担して、商業施設建設に伴う発掘調査を令和7年度(2025年度)から実施しています。

今回公開する調査区とその周辺の調査では、弥生時代中期末～後期初頭(紀元前後/約2,000年前)の大型掘立柱建物・祭祀土坑・沼沢地、平安時代中頃の掘立柱建物・土坑・溝、鎌倉時代の井戸・溝などがみつかっています。特に弥生時代の大型掘立柱建物(以下、大型建物)は、県内では最古かつ最大規模の建物であり、国史跡伊勢遺跡(守山市)で見つかっている弥生時代後期の大型建物の祖型と考えられます。



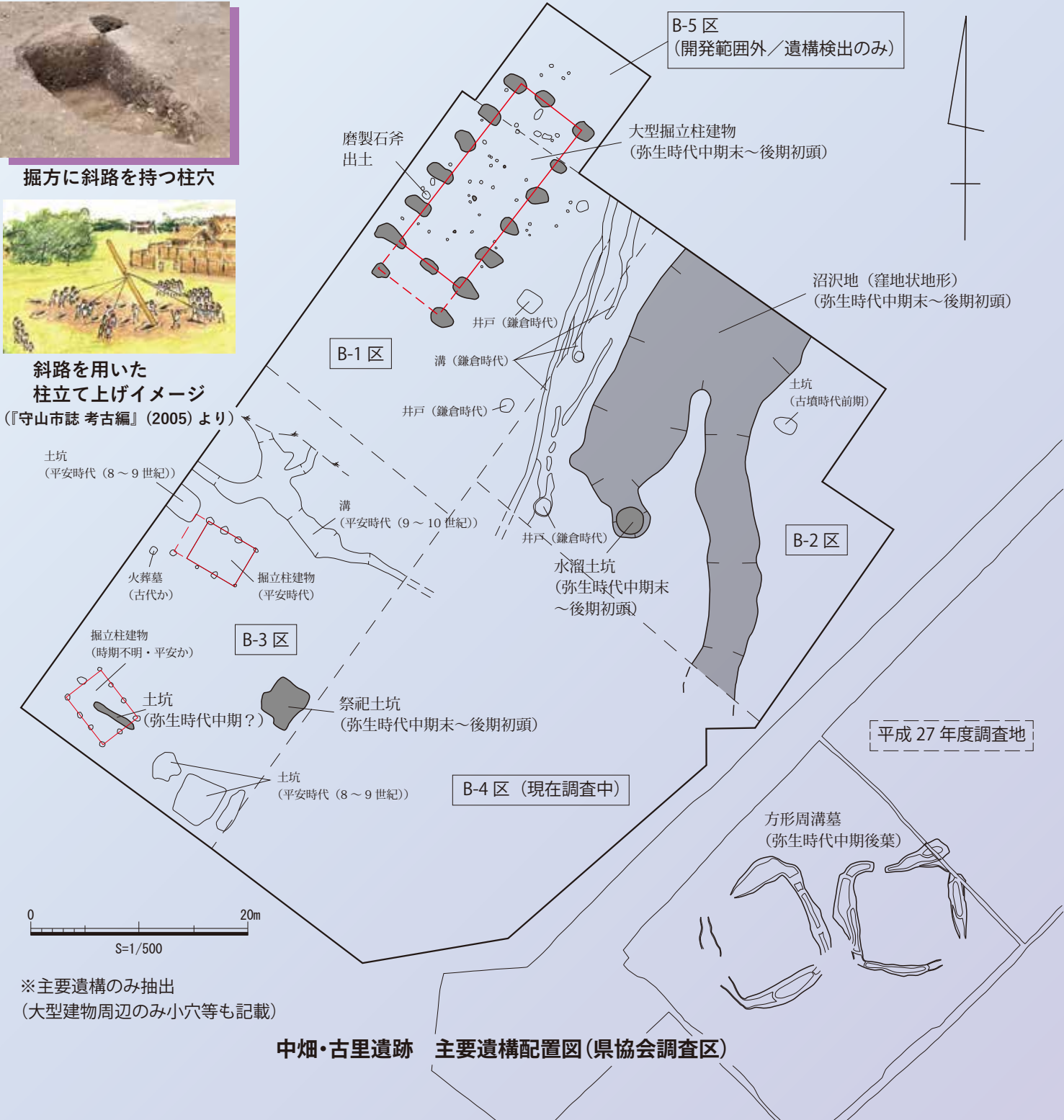
中畑・古里遺跡と今回の調査地点(赤塗部分)



掘方に斜路を持つ柱穴



斜路を用いた
柱立て上げイメージ
（『守山市誌 考古編』(2005)より）



中畑・古里遺跡 主要遺構配置図(県協会調査区)



弥生時代の大型建物

大型建物は、調査区B区(当協会調査区)の北端部で1棟が見つかりました。建物南東の眼前には沼沢地が広がり、微高地縁辺部にあたる地形の傾斜変換点付近に立地しています。柱穴内から出土した土器の特徴から、弥生時代中期末～後期初頭の建物と判断されます。

【建物規模と構造】 掘立柱建物で、平面形態は北東—南西方向に長い長方形を呈します。梁行1間(約7.0m)、桁行5間(約18.0m)、桁行の柱間間隔は約3.5mで、床面積は約126㎡を測ります。

桁行側柱の柱穴は、短軸1.0～1.5m、長軸1.5～2.5mの規模で、平面楕円形を呈します。柱穴掘方は外側が浅く、内に向かって傾斜するもの、あるいは段状になるものが大半で、内側が極端に深くなります。深さは最深部で0.7～0.9mとなり、柱を立てる際に外側の傾斜部・段を斜路として柱を落とし込んだのち、引き起こしたと想定されます。柱穴の重複などが認められないことから、建物は建て直されることはなかったと判断できました。

棟持柱の柱穴は、桁行側柱の柱穴に対してその様相が大きく異なります。掘削をおこなった建物南西端の棟持柱は、短軸約0.5m、長軸約1.8m、深さ約0.45mと側柱よりも小さな規模です(建物の外方には独立した棟持柱の痕跡



大型建物遠景(北西から)



大型建物(南東から)

は確認できません)。また、建物本体からさらに南西には、桁行の延長上に側柱と同等規模の柱穴が認められます(左図の建物点線部分)。桁行に柱筋が通るものの柱間間隔は約3.0mとやや短く、棟を支える梁行の中間に柱の痕跡は認められません。この南西面に張り出す柱穴は、庇状となって広縁が付随する構造などが想定されますが、具体的な構造についてはこれからの検討課題と言えます。

大型建物周辺の遺構

今回の調査地付近では、当該期(弥生時代中期末～後期初頭頃)の竪穴建物や掘立柱建物はこれまでに見つかっていません。一般居住域からは少し離れた位置に大型建物が単独で立地していたと考えられます。一方で、今回の調査地からは、大型建物とほぼ同時期の祭祀的要素の強い不整形土坑(祭祀土坑)や沼沢地が、平成27年度の隣接地における調査では方形周溝墓2基が見つっています。

【沼沢地】 大型建物から約15m南東に広がる窪地状の自然地形です。南側で二股に分かれ、西側は入り江状になって最奥に水溜め用と推測される平面正円形の土坑が見つっています。東側は溝状になって南に延伸します。堆積土には流水の痕跡を示す砂粒はほとんど見られず、水の流れが少ない湿地状態だったと考えられます。

【祭祀土坑】 大型建物から約40m南西に位置します。平面形態は不整形形で、規模は一辺3.2～4.0m、深さ約0.2mを測ります。弥生土器の大型の壺等が多く出土し、大型建物で執り行われた祭祀に関連する遺構と推測されます。

【方形周溝墓】 平成27年度の国道8号バイパス建設に伴う東側隣接地での調査において、2基が見つっています。大型建物から沼沢地を隔てた位置にあり、沼沢地が墓域を画する境界として機能していたとみられます。

出土した遺物

大型建物の柱穴から出土した土器は多くはありませんが、その特徴から、弥生時代中期末～後期初頭(紀元前後/約2,000年前)のものと考えられます。周辺の沼沢地や祭祀土坑から出土した土器も、大型建物とほぼ同時期のものに限られます。沼沢地や祭祀土坑から出土した土器の構成は、大型壺の比率が高く、甕が極端に少なく、甕が多く壺が少ない一般的な集落でのあり方とは異なります。特に沼沢地から出土した土器は、大型建物の正面にあたる今回の調査区の北寄りで集中して出土しており、大型建物で執り行われた祭祀(水辺の祭祀)に使用された土器類だったと考えられます。

また、沼沢地から出土した土器には、東部瀬戸内地域や大阪湾岸地域からの影響を受けた土器が含まれており、淀川水系を通じた他地域との交流が窺えます。



大型建物の柱穴から出土した土器



沼沢地・祭祀土坑から出土した土器

周辺の景観

改めて当地の立地をみると、妙光寺山の丘陵裾部から約150mの距離にあり、南東方向に約1.5kmの位置にある三上山を仰ぎ見るには絶好の立地と言えます。大型建物が三上山を遥拝するためのものであったことは想像に難くありません。

北東方向に約2kmの位置には、合計24個の銅鐸が発見された大岩山銅鐸出土地があります。この大岩山では、弥生時代中期末以降に銅鐸が制作され、埋納時期は弥生時代後期末～終末期と考えられており、今回の調査では直接的な物証は得られなかったものの、銅鐸祭祀との関わりも無縁とは思えません。



他地域から搬入された土器

まとめ

今回見つかった大型建物の1間×5間の平面構成や柱掘方に斜路を持つ構造は、森岡秀人氏が提唱する国史跡伊勢遺跡(守山市)で数多く見つかった建物を典型とする「伊勢型」大型建物の構造と一致します(森岡2006「大型建物と方形区画の動きからみた近畿の様相」『弥生大型建物とその展開』)。これまで伊勢遺跡での弥生時代後期中葉の大型建物が最古の事例に位置付けられていましたが、今回の発掘調査で新たな知見が得られました。最後に、得られた成果は、以下のようにまとめることができます。

- ①今回見つかった大型建物(弥生時代中期末～後期初頭)は、これまで伊勢遺跡が初源と考えられてきた大型建物(弥生時代後期中葉)の前段階にあたる県内最古の事例であり、かつ、建物規模も最大である。「伊勢型」大型掘立柱建物の祖型と位置付けられる。
- ②当該期の集落居住域から離れた地点に単独で構築され、微高地縁辺部の水辺付近に立地する。三上山を遥拝し、大岩山銅鐸との関連も示唆される聖域的な祭祀空間であったことが想定される。